



カトリック広島司教区平和の使徒推進本部

2017-2019年度広島教区年間テーマ

チャレンジ 新しい福音宣教 **わたしをお使いください**
— 教会へのチャレンジ —

大阪教会管区部落差別人権活動センター

11月27日に大阪教会管区部落差別人権活動センターの会議がありました。大阪教会管区は、名古屋、京都、大阪、広島、高松の5つの教区からなっていますが、この時の会議は、それぞれの教区の担当司祭5人と担当司教の大塚司教様がメンバーでした。会議では活動センターの現状と、これからの活動運営のあり方について大塚司教様から説明があり、そのために規約の一部の改訂案が検討されました。

この時に、みんなに配られて本があります。少し紹介したいと思います。

『部落問題と向きあう若者たち』内田龍史編著 解放出版社

少し引用します。

「本書は、二〇〇九年から二〇一二年にかけて、雑誌『部落解放』に連載された特集「部落問題と向きあう若者たち」を、単行本として再録・再構成したものである。

特集は、部落問題と向きあっている若者たちが、どのように部落問題と出会い、どのような経験をし、今どのようなことを考えているか、そしてどのように未来を展望しているかについて、インタビューに回答していただく、あるいは本人に執筆していただくものであった。

その目的は、部落問題と向きあう〈人の魅力という可能性〉から部落問題の現状を伝えることである。被差別部落出身といっても多様性があり、ひとりとして同じ人はいない。しかし、社会の中の少数派＝マイノリティ問題にしばしば生じがちなことであるが、「部落の人」とい

うカテゴリーでのみでとらえられてしまい、十把一絡げに、しかも否定的に評価されてしまうことがある。他方で差別的撤廃を目指すマイノリティによる社会運動は、自分たちの要求を社会に認めさせるために、団結・連帯を必要とする。それゆえ一枚岩の団結が優先され、個々の多様性を表出させることが困難になる傾向がある。それは部落解放運動においても例外ではない。

こうした傾向に対して、一人ひとりに自分の人生があり、さまざまな課題と向きあいながら生きているという当たり前のこと。そのことを少しでも知ってもらえば、部落差別的撤廃・部落問題の解決に向かっていくのでないか。」

ということで、十数人の若者の話が載っています。読んでみてください。

血のつながりを超えて

9月に浜松でブラジル人司牧者の集まりがありました。その時、担当司教の松浦司教様が家庭について話してくださいました。それを少し分かち合いたいと思います。

シノドスで、司教様たちが家庭について話し合われましたが、現在の家庭は様々な形態があるので、モデルを使って話すことが難しくなった。それでも家庭

は出発点であり、力です。神の家族、神の国に向かう、出発点であり力です。自分の小さな家庭から抜け、神の家族へと向かいます。

例えば、アブラハムは、自分の土地を離れ、神様の示される場所に向かって旅をします。自分の土地を離れるということは、その土地と血のつながりから離れるということです。そして神様を中心とする新しい家族をつくるということです。

血のつながりである親子関係は無条件

に相手を受け入れる関係です。それは子供に安心感を与えます。そして、神のみ旨を垣間見せます。無条件に愛されることは、多くの人が家庭で体験します。が、現実には子供を愛さない親もいます。その場合でも、無条件に受け入れられる体験が必要です。親子の関係は、私とあなた、夫婦や友達との関係に広がっていく、この関係は継続する努力が必要です。わたしたちは血のつながりを超えたつながり神の民としてつながりに向かっていきます。様々な国の人々が、一緒に。

広島司教区宣教司牧活動

教区 宣教 司牧 活動	地区 宣教 司牧 活動	協働 体 宣 教 司 牧 活 動	緊急的 優先的 期間限定 活動	小 教 区 宣 教 司 牧 活 動		
				教区宣教司牧優先課題	教区創立100周年に向けて	聖年・特別年等
				①青少年育成 ②召命促進 ③教区カテキズム作成 ④津和野殉教者列聖	2013年度 教区創立90周年 チャレンジ 新しい福音宣教 ～わたしをお使いください～ 2014年度～2016年度 「家庭へのチャレンジ」 2017年度～2019年度 「教会へのチャレンジ」 ①カトリックの歴史を学ぶ(聖年) ②福音を伝える使命(聖年) ③隣人に仕える使命(王職) 2020年度～2022年度 「社会へのチャレンジ」 2023年度 教区創立100周年	信仰年 (2012年10月11日～ 2013年11月24日) 奉獻生活の年 (2014年11月30日～ 2016年2月2日) いつくしみの特別聖年 (2015年12月8日～ 2016年11月20日) 浦上キリシタン流配150年 (2018～2023)
三つの柱 活動の源泉	第一の柱：平 和 第二の柱：きょうど 第三の柱：美 成	平和の使徒となろう (広島教区の固有の召命)				

広島教区内全教会巡礼達成者

- 第028号 萬博義・頼子
 - 第029号 濱口直樹
 - 第030号 青山文代
 - 第031号 清水フロールデリザ
 - 第032号 運崎ジョセリン
 - 第033号 行友レリア
 - 第034号 戸澤ロサリー
- おめでとうございます。

—「教会へのチャレンジ」のヒント—

母である教会

今日はもう一度、母である教会というイメージに戻ります。わたしは、この母である教会というイメージがとても好きです。そのためこのイメージに立ち戻りたいと思います。それは、このイメージが、教会がどのようなものであるかをわたしたちに語るだけでなく、教会、すなわちわたしたちの母である教会が、どのような姿をますます示すべきかをも語ってくれるからです。

三つのことを強調したいと思います。その際わたしはつねにわたしたちの母親に目を注ぎます。母親が行うこと、生きていること、子どものために苦労していることに。先週の水曜日に申し上げたことを繰り返します。母親は何をしているのでしょうか。

1 母親は何よりもまず、人生をどう歩むかを教えます。人生をよく歩むすべを教えます。母親は子どもを方向づけるすべを知っており、成長して大人になるために歩むべき人生の正しい道をつねに示そうと努めます。母親はそれを優しく、愛情と愛をもって行います。脇道にそれたり、谷底に落ちそうになったわたしたちの道を正すときでさえも。母親は、子どもが人生の道をよく歩むために何が大切かを知っています。しかも彼女はそれを書物からではなく自分の心から学びます。母親の大学は彼女の心です。彼女はそこで子どもを前進させるすべを学ぶのです。

教会が行うのも同じことです。教会はわたしたちの人生を方向づけます。教会はよく歩むための教えをわたしたちに授けます。十戒のことを考えてみてください。十戒は、成長し、堅固な行動基準をもって歩むべき道をわたしたちに示します。十戒は、それを与えてくださった神の優しさと愛から生まれたものです。こういう人がいるかもしれません。そうはいつでも、十戒は命令ではないか。すべて「してはならない」ではないか。わたしは、十戒を読んでくださるようお願いしたいと思います。一部忘れたかたもいるかもしれませんが。それから、十戒を積極的な意味で考えていただきたいと思います。そうすれば次のことが分かると思います。十戒は、神と、自分自身と、他の人々に対するわたしたちの行動様式について述べます。これは、母親が、

よく生きるためにわたしたちに教えてくれることにほかなりません。十戒は、物質的な偶像を拜んではならないと招きます。偶像はやがてわたしたちを奴隷にするからです。神を思い起こし、父母を敬い、偽りをいわず、他の人を尊重するよう招きます。……十戒をこのようなかたで考えてみてください。そして、それが、母親が人生をよく歩むために与えてくれることばや教えであるかのように思ってください。母親は決して悪いことを教えません。彼女は子どもの善だけを望みます。教会が行うのも同じことです。

2 二つ目のことをお話ししたいと思います。成長して大人になった子どもは、自分の道を選び、責任をとり、自分の足で歩きます。彼は自分の望むことを行います。時として道を踏み外すこともあります。ちょっとした事故を起こすこともあります。母親はどんな場合にも、つねに忍耐強く子どもに同伴し続けます。母親を促しているのは愛の力です。母親は、分別と優しさをもって子どもの歩みに従うすべを知っています。たとえ子どもが過ちを犯したときにも、彼女はつねに理解し、寄り添い、助ける方法を見いだします。わたしの母国アルゼンチンでは、母親は「守る」(dar la cara) ことができるといいます。どういう意味でしょうか。母親は自分の子どもの「側に立つ」ことができるということです。彼女はつねに子どもを弁護せずにはいられないということです。わたしは、牢獄にいる子どもや、困難な状況にある子どものために苦しむ母親のことを考えます。彼女は子どもが有罪かどうかを問題とはせず、子どもを愛し続け、しばしば屈辱を耐え忍びます。それでも彼女は恐れることなく、自分を与えるのです。

教会も同じです。教会はあわれみ深い母です。教会は理解し、その子らが過去や現在、過ちを犯したとしても、つねに助け、励まそうと努めます。決して家の戸を閉めません。教会は裁かず、むしろ神のゆるしを与えます。神の愛を示します。神の愛は、罪の淵に落ちた子にも、再び道を歩むよう招きます。教会は、彼らの闇に歩み入り、希望を与えることを恐れませんが、教会は、わたしたちが靈魂と良心の暗闇の中にいるとき、わたしたちの闇に歩み入り、希望を与えることを恐れませんが、教会は母だからです。

3 最後に申し上げたいことはこれです。母親はまた、自分の子どものために、数え

きれないほど何度も願い、あらゆる戸をたたきます。それも愛をもって。わたしは、母親がとくに神のみ心の戸をたたくすべを知っていることに思いを致します。母親は自分の子どものために多くの祈りをささげます。とくに、からだの弱い子ども、助けを必要としている子ども、人生において危険な道や間違った道に踏み入った子どものために。数週間前、わたしはローマのサンタゴスティーノ教会でミサをささげました。そこにはアウグスティヌスの母モニカ(332頃—387年)の聖遺物が収められています。聖なる母モニカは、息子のためにどれほど神に祈りをささげ、涙を流したことでしょうか。親愛なる母親の皆様。わたしは皆様のことを思います。皆様はご自分のお子様のために、どれほどうむことなく祈られることでしょうか。祈り続けてください。そして、皆様の子どもを神にゆだねてください。神のみ心は大いなるものなのですから。子どものための祈りで、神のみ心の戸をたたいてください。

教会が行うのも同じことです。教会は、祈りによって、その子らのあらゆる状況を主のみ手にゆだねます。母である教会の祈りの力に信頼しようではありませんか。主が耳を傾けずにいることはありません。主はつねに、予期せぬしかたでわたしたちを驚かします。母である教会はそのことを知っています。

以上が今日皆様にお話ししたかったことです。わたしたちは教会のうちにいつくしみ深い母の姿を見いだします。この母は、人生の歩むべき道をわたしたちに示します。つねに忍耐とあわれみに満ち、理解し、わたしたちを神のみ手にゆだねるすべを知っているのです。

教皇フランシスコの17回目の一般謁見演説
「母である教会」(カトリック中央協議会 訳)

